



発掘! さわめびと

高校進学後、本格的に陸上を開始。来年のインターハイ出場を目指す天性のスプリンター。



まえだほのか
前田 望乃花さん

2002年東京生まれ。2歳半のときに家族と一緒に佐久穂町に移住。小学校時代（八千穂小）から運動会では負け知らず。小5、小6と東信大会100mで優勝。6年のときは県大会3位。佐久穂中時代も、東信大会100mで3年連続優勝し、中3のときは200mでも優勝（県大会3位）。中学時代は陸上部がなかったこともあり、バスケットボール部に所属。佐久長聖高校に進学後、本格的に陸上を始めた。両親と3人家族。

「誰かが見ていると思ったら、絶対気が抜けなくて…。私、人の目があると、頑張っちゃうんです。だから、レース後半、一着とわかっていても、流せません」

走

ついで、足が軽いときは、風になった感じがします」と話す前田望乃花さん。

本格的に陸上を始めて半年に満たないが、走るたびに手応えを感じている。現在、一〇〇mが十二秒五七で県ランキング第一位（一年生では五位）、二〇〇mが二十五秒六〇で同じく七位（一年生ではトップ）、マイルリレー（四×四〇〇m）に出場するために始めた四〇〇mが五十九秒八二で同じく十位（一年生ではトップ）にそれぞれランクされている。

一〇〇m、二〇〇mとも、中学時代の記録を〇・五〜一秒近く短縮。「今は伸びる中です。短距離の魅力？ 走り終えたときの達成感が凄い。ゴールして、両隣に人がいないときは、最高の気分です」と笑みを浮かべる。

小学校時代、運動会の徒競走では六年間ぶつちぎりの一位だったという望乃花さん。小五のとき初出場した東信大会一〇〇mで優勝し、翌年も優勝。六年のときは県大会で三位になった。中学時代も、東信大会一〇〇mで三年連続優勝し、三年のときは、二〇〇mでも優勝。県大会で五位となり、北信越大会に進んだ（結果は七位）。

まさに天性のスプリンターとあっていい望乃花さんだが、「小、中学生のころは、大会前日に一回練習するかしないかで、ひよろつと出る感じでした。中学のときは陸上部がなかったこともあり、バスケット部に所属した。

実はそんな望乃花さんを陰で支えてきた人がいる。父・俊一さんだ。かつて中距離の選手だ

った俊一さんは望乃花さんに短距離の才能を認めると、専門書を読んだり、動画を見るなどして勉強し、その知識を娘に教え込む（また、娘と競おうと考えた俊一さんはマスターズ陸上に登録、毎年大会に出場している）。

レースのある日、俊一さんは必ず会場に向き、望乃花さんにアドバイスを与える他、レース中の撮影をする。望乃花さんが子どものころから続く習慣だ。「お父さんがいてくれないと安心できないという感じですね」と、望乃花さんも俊一さんには全幅の信頼を寄せる。

そんな走るために生まれてきたような望乃花さんだが、高校進学時は陸上か、バスケットかで最後まで悩んだ。実は望乃花さん、陸上は中学でやめるとひそかに決めていた。

「理由はバスケットのほうが全然楽しかったから。陸上は一人ぼっちで寂しくて、大会前の緊張感が異常で、ストレスが凄かった…。だから中学最後の大会は、これでもう大会に出なくていいんだと思ったらうれしすぎて…。」

しかしその後、進路をめぐって激しい親子ゲンカが続き、結局は陸上を選択する。陸上を選んだ一番の理由は「陸上の方が、輝けると思ったから」。

昨年、佐久長聖に新しい陸上のコーチが赴任した。早川恭平先生だ。陸上を選んだのも一つの理由がそれだった。

「凄い先生が入って来たよ、って言われて」

同じ理由で佐久長聖に入った選手がいる。一人は女子一〇〇m県トップ、もう一人は女子一〇〇mハードル県トップの選手だ。その選手たちと毎日ハイレベルな練習を続けている。しかも、つねに手を抜かないのが望乃花さんの身上でもある。

「誰かが見ていると思ったら、絶対気が抜けなくて…。私、人の目があると、頑張っちゃうんです。だから、レース後半、一着とわかっていても流せません」

高校に入って初めて陸上のチームメイトができた。

「みんな陸上が好きで、陸上愛が凄いですよ。しかも人としてもみんな私より上。私より速い選手がチームにいるって、すごく心強いです」

狙うは来年のインターハイ出場だ。



今年7月に行われた県大会4×400mで3位になったときの佐久長聖メンバー。左から二人目が望乃花さん（＝松本平広域公園競技場）